

山に親しみ山に想う (12)

— 峠 —

〈文・写真〉 =岡本=

峠について考えると、思い出すことがある。山の本を読んでいて、最初に徳本峠の地名に出くわした時、「とくもと」と読んでいたことである。そのうち、「とくごう」だと知ることになるが、日本アルプスに踏み込んだこともない者にとっては、あり得ることである。徳本峠は島々から上高地へのルート途中にあって、峠を目的地にする登山者はいない。高いピークを目指す登山者にとって、峠は目的地ではなく、通過点である。精々一息つき、次の行動を起こすための結節点にすぎない。しかし、高みばかりに拘らない低山歩きを好みとする者にとっては親しみがあり、ピークハンターとは意味合いは異なってくる。石仏などがあって、峠近くの集落の人々の生活の息吹の残滓が感じられる興味深いところである。

大島亮吉は「山にのぼる者の心を、最も強く惹きつけるものはなんといっても峰の頂だ。けれど、その頂と頂との間の、低い凹みを言う峠というものにも、私たち、山にのぼる者の心を惹くに足るものが幾分かはあるように思える。」と書いている(「山紀行と随想」の「峠」の項冒頭)。

峰の頂が主で、峠は幾分心が惹かれるものの脇役だと言っているが、著名な登山家が峠に関心を持ち考察を加えていることに、峠愛好者として嬉しく思う。「山の雑学百科」(東京新聞)や「山の常識釈問百答」(ヤマケイ新書)に峠の記述がなく、編集者が峠を関心外に置いているのは何故なのか理解し難い。これまでの山行を回想すると、山頂展望の良い高山の経験が少ない故か、より印象的なのは、峰の頂よりも峠の方である。

峠という文字は、本来の漢字ではなく、和製の国字だという。日本国語大辞典(小学館)には、「手向(たむけ)の変化したもの、通行者がここで道祖神に手向をしてまつり、旅路の平安を祈ったところからいう。①山の坂道を登りつめた最も高い所、山の上り下りの境目 ②物事の勢いのもっとも盛んな時期や状態、最高点」とある。

「暮らしのことば語源辞典」(講談社)には、「万葉集に「多武気」と書かれた例があり、古くはタムケという形であった。タムケは動詞タムク(手向く)の連用形が名詞化したもの。タムクは神仏に供え物をするという意で、主に旅の無事を祈るときにいう。峠には道の神が座すと信じられ、その道の神に「手向け」をする場所をタムケといったのである。室町時代以降、「タウゲ」に転じ、さらに「トウゲ」になった。」という。

日常の生活範囲である狭い集落を出て隣の集落に行くにしても、安着を祈りつつ峠を越える。さらに遠くに旅に出るとなると、峠まで見送りにきた人から餞別をもらい、皆んなで無事の旅路を道の神に祈ったであろう。登山用語では、峠の形状から乗越(のっこし)、単に越(こえ、こし)というし、山稜に着目して、鞍部、タル、タワ、コル、窓などという。峠は生活感や人間臭さを濃厚に漂わせている。こんな言い方もできないか。峠は生活者が越えるまでは峠ではなかったが、峰は存在するだけで峰であるとも言える。少なくとも人々が越えな

なくなった峠は、峠ではなく単なる鞍部と称すべきであると。(峠は山稜のたわんだところであり、湾曲を意味する「たお」と古くは呼んでいた。「とうげ」とは、「たお」を越える場所を指す「たおごえ」から「とうげ」と変化したという「たわむ説」もある。)

これまで幾多の峠を越えてきた。疲れを癒し、昼食をとり、石仏などを拝するなど寄り添ってきた峠のほんの幾つかを紹介する。



<峠の茶屋> 峠の茶屋という言葉だけを口にすることで郷愁に浸ることができるのは、我々の世代までだろうか。残念だが、茶屋のある峠はほぼなくなったのではとの思いに捉われる。河口湖北岸に構える御坂山塊の御坂山と黒岳の間に旧御坂峠(1571m)がある。笛吹市と河口湖町を結ぶこの峠には、御坂天神の祠と廃屋の御坂茶屋がある。茶屋の前の芝地では、少ない登山者が三々五々休息しているのみだ。この峠と茶屋の役割は、天下茶屋バス停前にある、河口湖の眺望の良い天下茶屋とその傍にある隧道(旧御坂隧道)に取って代わられてしまった。繁盛する天下茶屋と廃墟と化した御坂茶屋の対照に愕然とする。(2016. 8. 13)



<民話のある峠らしい峠> 奥武蔵の、大霧山の尾根筋南方にある旧定峰(さだみね)峠(620m)は、東秩父白石側の経塚に下る道と秩父定峰側に下る道が交差しており、秩父一番札所に向かう巡礼道でもある。往昔(編集人注: おうせき又はおうじゃく・過ぎ去った昔)には、多くの村人や巡礼者が往来した証のように峠の道は深くえぐられている。峠端の石祠は控えめに佇んでいる。身も心も、閑静でどこか荘厳な雰囲気を感じた峠に沈潜していく。巨

人のダンダラボッチがこの峠に腰掛けたという巨人伝説もある。大霧山の尾根筋北方にある粥新田(かいにだ)峠では、ダンダラボッチが粥を煮たという。粥新田峠と、そして旧定峰峠の南にある定峰峠には、車道が通っており峠の趣はない。古典的な峠らしい峠、旧定峰峠には、車道に役割を譲らざるを得ないという峠受難の時代の波に最後まであがってほしい。(2014. 10. 18)

〈あまりにも有名な峠〉 甲州市塩山と小菅村の鞍部にある大菩薩峠(1897m)は、江戸時代までは武蔵と甲斐を結ぶ甲州道中の裏街道であった青梅街道の重要な峠として利用された。中里介山の小説「大菩薩峠」の力もあって抜群の知名度がある。旧峠は今の「賽の河原」である。霧深い峠として知られるが、自分が歩いた五月末も霧が張り出していた。(2010. 5. 29)

〈石仏の峠〉 峠は神仏がおわす宗教的な場でもある。秦野駅近くの弘法山と念仏山の尾根上鞍部にある善波(ぜんば)峠(160m)には、首が落とされた石仏五体があり、その傍に御夜灯がある。遠く江戸時代から往来する人々を見守ってきた石仏が、時代が変わって廃仏毀釈の禍にあった悲しい実態を訴えている。(2011. 1. 22)



〈気になる峠〉 忘れられたような峠である。秩父鉄道樋口駅から訪れる人も稀な低い陣見山(531m)に上った際に通過した榎峠(430m)には、馬頭観音と石祠が周りの木々に身を隠すようにひっそりとあった。往昔には、峠としての役割を立派に果たしてきただろうに、今この寂寥感は何なのか。そんな思いに呪縛されて佇むばかりである。峠を越えた直ぐ先に車道があるのに気がついた。(2015. 2. 14)



＜峠の下にトンネル＞ 峠の道筋が車道とトンネルに取って代わられる事例は多い。その一例を挙げる。都留市の今倉山南麓にある道坂峠(1020m)の下に道坂トンネルが通っている。峠は生活道路としての役目を終えて、今倉山と御正体山への登山者のみを通る道でしかない。(2015. 10. 31)

＜峠は尾根越え＞ 一つの尾根に架かる峠の数では、笹尾根が多いのではないか。広義の笹尾根(三頭山から高尾山)でみると、西原、笛吹(うずしき)、小桐(こゆずり)、日原、浅間、三国、醍醐、和田、奈良子、明王、日沢、小仏の十二の峠道が横切っている。これらの峠は、武蔵と相模、甲斐の国越えの物資や人の往来を担ってきた。

＜三ツ峠とトッケ＞ 河口湖畔に三ツ峠がある。三ヶ所の峠などなくて、屏風岩の峰の開運山を中心に西の木無山、北の御巢鷹山の三峰を称しているもので、峠イコール峰、嶺だという。

他に、深田久弥は「日本百名山」の悪沢岳の項で、古記に「赤石山ハ絶頂三岐シ、荒川・鍋状・赤石岳ノ三連峰ヨリ成レル故ニ、旧名ヲ三ツ峠ト言ヒ、絶頂ニ祀レル山神ヲ、三ツ峰神ト言エリ」とあると述べて、三ツ峠と同じパターンを例示している。尖峰をトッケと呼ぶが、この発音が峠に似ているため、峠の文字がこじ付けられたと考えて間違いないとされている。東京と埼玉の境界をなす長沢背稜上の芋ノ木トッケ、黒トッケ(西谷山)、三ツトッケ(天目山)は、正に尖峰の意である(「山名のふしぎ」谷有二、平凡ライブラリーを参考)。

今こそ、峠歩きができる最後の時代かもしれない。いつしか「峠歩き」ではなく、「峠の廃道歩き」と名前を変え、懐かしさを込めて盛んに歩かれるようになるかもしれない。